

助産学専攻を修了して現場で教わったこと

著者	野口 裕子
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	10
ページ	70-70
発行年	2005-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/548

助産学専攻を修了して現場で教わったこと



助産学専攻科2期生 野口裕子

平成12年4月柏崎市役所に保健師として就職して以来、現在まで母子保健事業を担当している。また配属先が基幹型子育て支援センターのため、日頃利用している子育て中の方からの来所相談や電話による育児相談に応じている。仕事を通して感じることは、「ひとりひとりのケースからすべてがはじまる」ということである。以下に私が関わったケースを記す。

Aさんは、第1子を是非母乳で育てたいと乳房マッサージを熱心にして妊娠期間を過ごしていた。無事に出産を終え、実家へ帰り助産師訪問を受けた。「母乳だけでこのまま大丈夫です」と助産師に励まされ、母乳栄養を続けた。しかし、母乳の出があまりよくなく、1時間おきに泣くことが多かった。体重増加も悪く助産師に相談してミルクを足してみようと試みたが、実際にミルクをあげることができない。このままでは児の体重増加が期待できないという助産師からの連絡を受け、実際に母子と面接した。児は泣き叫んでおり、母親の表情もとても暗く切ない表情だった。母親に今までの育児をねぎらいながらミルクをあげる必要性の説明をしてミルクをその場で飲ませた。母親はミルクを飲ませたとたん到大粒の涙を流し、「実母からもミルクをたすように勧められていたが、ミルクを飲ませると(実母に)子どもを取られる気がして、あげることができなかった」と話をし始めた。この関わりをきっかけとして数日後、家庭訪問と電話訪問を実施し、1ヵ月後に育児学級への参加の呼びかけを行った。育児学級には夫と共に参加をし、母親の表情も明るくなっていった。児の体重も順調に増え、心配なことがあればいつでも元氣館に電話をしてほしい旨を伝え

た。一緒に参加した夫は「(出産直後は、)妻が笑わなくなった。化粧もしなくなり、一切外出しただらなくなった。普段の妻とは別人のようであった。今は普段の姿に近づきつつあるが、もう少ししたら自宅に戻るののでその後は自分もできるだけ育児を手伝いたい。」と話をしていた。育児学級が終わり、2ヶ月が経過した。母親からの電話はなく、4ヶ月児健診で偶然にも母子を問診することとなった。母親は、「初めてミルクをあげる頃が一番気持ちの余裕がなかった。」とその時を振り返った。「今は、時々実母に育児を手伝ってもらったりしながら自分のペースで育児している。気分もずいぶん楽になった。」とも話していた。今育児で気になることについてはその場で話をしたが、今後も気軽に話をできる相談相手として、地区担当保健師の紹介と地元の子育ての集いを紹介することとして母親に説明を行い、了解を得て私の関わりは終わった。

Aさんの関わりを通して改めて感じたことは、連絡を受けてからその人を活かすにはどうしたらよいか?を常に考えて援助を行ってきたということである。訪問はもちろんのこと、あらゆる母子保健事業の機会を通じ親子の関わりを見守ってきた。あたりまえのことであるが、学生の時、ひとりひとりの看護・助産計画を立て実行していったが、就職して改めてケースの大切さを実感している。就職して間もない頃、先輩保健師からよく言われていたことがある。『ひとりひとりのケースからすべて始まる。ひとりに関わることで地域が見えてくる。その人を最大限活かすのが看護である』と。このあたりまえのことを常に考えこれからも仕事を続けていこうと思う。